



蓮也とヘティスは冥界へと下ることになった。その途中、ミリオンゲートを超え、黄泉比良坂（よもつひらさか）を下って行った。

ヘティス

「結構、深いところまで来たような気がするわ」

蓮也

「そうだな」

霧掛かった坂を下ると、大きな門があった。  
すると、そこへ声をかけてくる者がいた。

声 1

「ちょっと待ってくれ〜！」

声 2

「お待ちになって〜！」

ヘティス

「ん？誰、アナタたち」

メルク

「俺の名はメルク！」

コノハ

「私はコノハと申します」

メルクと名乗る元気がよさそうな少年は不思議な雰囲気醸し出しており、コノハという美しく品のある女神は神聖な光を発していた。

ヘティス

（また変なのが来たわ・・・）

「・・・で、何の用なの？」

メルク

「何の用って、俺はヘティス、キミの守護霊さ！」

コノハ

「私は蓮也様の守護霊でございます」

ヘティス

「守護霊・・・？」

メルク

「俺の祖霊はヘルメス様とテティス様だ」

コノハ

「私の祖霊はコノハナサクヤヒメ様でございます」

ヘティス

（なんか私の守護霊と言う男の子はちょっと子供っぽいわね・・・。それに比べて蓮也の守護霊はおしとやかで、大人っぽいわ・・・。まあ、どちらも悪い雰囲気はしないからいいんだけど）

蓮也



「ほう」

「確かに、エネルギー的には俺に近いものがある。で、その守護霊が俺たちに何の用だ」

コノハ

「アナタたちが冥界下りをすると言う情報が天界に入り、祖霊様の命令で、手助けするようと言われて、やってきました」

ヘティス

「ふーん、そうなんだ」

メルク

「そうさ～。さっきもミリオンゲートで、実は俺たちがキミにエネルギーを送ったから、運の良さが一時的にアップして一発で通れたんだぜw」

ヘティス

「ふむふむ、よくわかんないけど、そうなのねw」

（確かに、何かエネルギーを感じたけど、この子たちから発するエネルギーと同じだから、そうかもねw）

メルク

「あと、エロスとタナトスってキューピットに合わなかったかい？」

ヘティス

「ああ、会ったけど、どっか行っちゃったわ」

メルク

「そうなんだ。何事もなくてよかった。アイツらは根は悪い奴らではないんだけど、トンデモないイタズラをするから気をつけた方がいいよ」

ヘティス

「私が、お尻ペンペンする、って言ったら怖がって逃げていっちゃったわw」

メルク

「そっか、それならいいけどw」

蓮也

「守護霊か何かは知らんが、俺は先へ行く」

ヘティス

「そうね、とりあえず時間に限りがあるから急がなくっちゃ」

コノハ

「蓮也様、アナタのお探しのエウリディーチェ様ですが、私どもの情報では、彼女は冥王ハーデスに捕まり、牢獄に閉じ込められております」

蓮也

「なんだと？ならば、そのハーデスからエウリディーチェを取り戻さねばなるまい」

コノハ

「お待ちください。ハーデスは恐ろしい力を持っている冥界の王です。それを警告し、止めにやって参りました」

蓮也

「それは無駄な話だ。俺は相手が誰であろうと行く。そして、そのハーデスが彼女の受け渡しを拒むのであるならば、実力行使あるのみだ」

メルク

「コノハちゃんはお淑やかなのに、キミの守護対象者の蓮也さんは滅茶苦茶だ・・・w」

コノハ

「いつも私が引き止めるエネルギーを送っているんですけど、ぜんぜん止まりませんの・・・」



ヘティス

「守護霊さんたちは、こう言っているけど、どうするの？蓮也・・・」

蓮也

「言っておくが、俺は普通だ。普通にそのハーデスとやらを倒すだけだ。怖ければ、お前たちはついてこなくてもいい。俺一人で行く」

ヘティス

「じゃ、私も行くわw」

メルク

「あー、ヘティスまで、そんなこと言い出しちゃった・・・w」

コノハ

「やはり止めてもダメなのですね・・・」

メルク

「とりあえず、ついて行くしかないね」

コノハ

「そうですわね・・・」

このような会話をしながら、蓮也とヘティスと守護霊の四人は、門の中へと入って行った。

門の中に入ると、多くの出店が並んでいて、ナイトマーケットのようになっており、大勢の人たちで賑わっていた。マーケットは多くのランプで照らされ、美しい梅や桜などがライトアップされており、その下で食事をしながら酒を飲み花見をする者や踊ったり歌ったりする者もいた。

ヘティス

「あら、何か楽しそうなところに来たわw」

蓮也

「けど、遊んでいる暇はない」

ヘティス

「そうね」

コノハ

「この先が冥界です。こちらで旅の準備をします。ここでは食べ物やお酒が売られていますが、それらの飲食はお控えください。もしあの世の物を食べてしまうと、現世に帰れなくなってしまうです」

メルク

「黄泉竈食（よもつへぐ）って言うんだw」

ヘティス

「けど、飲み食いするにもお金が必要なんでしょ？お金なんか持ってないし」

コノハ

「あの世での通過はグナ（徳）と言います。アナタたちのハートに刻み込まれたエネルギー量で決まります。これは現世で、どれだけ徳を積むかによって決まってきます」

メルク

「例えば、あの花見してお酒飲んでるおじさんいるだろ？胸を霊視すると108グナって書いてあるだろ？」

ヘティス

「あ、ホントだ」



メルク

「一生かけても大体みんなそれくらいなんだ。けど、少ないグナの人ほど、ああやって飲み食いして、天界に行く切符がいつまでたっても買えないんだ」

ヘティス

「そうね～、美味しそうだし、楽しそうだし、全部使っちゃうのはわかるわ～」

メルク

「ヘティス、キミは食いしん坊だから気をつけてね w」

ヘティス

「そんなこと、言われなくてもわかってるわよ！こんなところにずっといたくないし」

メルク

「ほら、そのおかなが減るとカリカリする癖、直した方がいいよ～」

ヘティス

「余計なお世話よ！」

(なんか私の守護霊、ムカつくわ・・・)

メルク

「ほら、そんなこと言うからキミのハートのグナが減っちゃったじゃないか」

ヘティスのハートを見ると、1100 から 1080 とグナ（徳）が減っていくのが見えた。

ヘティス

「なによ、これ・・・」

(・・・とりあえず、ここでカリカリするのはやめた方が良さそうね)

「けど、普通が 100 グナくらいだとすると、私は 1000 グナ持っているから、まあまあお金持ちね w」

コノハ

「ヘティス様は先日、蓮也様の命をお救いいただきましたし、その前に、桃也様の心もお救いになりましたので、その時のグナ（徳）かと思われます」

ヘティス

「そうなのね。で、蓮也はいくつなの？」

と、ヘティスは蓮也の胸を霊視すると 3020 とある。

ヘティス

「え・・・、蓮也の方が多いいじゃないの・・・！」

メルク

「蓮也さんは、パドマリアで善政を敷いて、人々から感謝されたからね」

蓮也

「ふむ、まあ、俺にあの世の通貨は必要ない。先を急ぐとしよう」

コノハ

「お待ちになってください。この先に冥界の門があります。そこにはケルベロスと言う恐ろしい魔犬がいるのです。ですから、もしそこを通るなら、ここで“魔犬のお菓子”を 2 個買うとよいでしょう」

ヘティス

「そのお菓子は一個じゃダメなの？」

コノハ



「帰り道の分もありますので」

ヘティス

「なるほどねえ」

「で、そのお菓子はどこ？」

コノハは蓮也とヘティスを魔犬のお菓子売り場へと案内した。そこには、ビスケットのよ  
うなお菓子が並んでいた。

ヘティス

「青色と紫色の縞々（しましま）のビスケット……。美味しそうじゃないわ……」

メルク

「まあ、キミが食べるわけじゃないからw」

ヘティス

「そうなんだけど……。で、値段は……。1000 グナ……。結構、高いわね」

コノハ

「お金は全部使わずに 1000 グナだけ残しておいてくださいね。カロンの渡し舟に 500 グ  
ナかかり、往復で 1000 グナですのぞ」

ヘティス

「じゃ、私と蓮也と合わせて 4000 グナあるから、このお菓子を二つ買って、船の往復で  
も 1000 グナ余るから大丈夫ね」

そこへ羊の格好をした老人が話しかけてくる。

老人

「もしもし、旅の方達、ハーデスの城へに行くには、この豊穰の角“コルヌピア”が必要  
じゃぞい」

メルク

「あ、パーン様！」

ヘティス

（さすがあの世ね……。変なのばっか登場するわ……）

この老人は羊神のパーンと言う。頭に羊の角があり、上半身は裸、下半身は羊である。

パーン

「ハーデス城の門は硬く閉ざされており、この角を掲げねばその扉は開かぬのじゃ」

メルク

「ああ、教えちゃったよ……。門が開かないから諦めて引き返すってストーリーだった  
のになあ」

ヘティス

「ふーん。じゃあ、羊のおじいさん、その角ちょうだい」

パーン

「ただではやれぬぞい。ワシも老後の資金が必要で、ここまで出稼ぎに来たってわけじゃ。  
今日は気分がよいので、特別大サービスして 3000 グナで売ってやろうw」

ヘティス

「結構高いじゃないの！それを買ったら魔犬のお菓子が買えなくなっちゃうし」



蓮也

「それがないと門が開かぬというのなら、それを買うことにする」

ヘティス

「え？蓮也、そしたら魔犬ケルベロスはどうするの？」

蓮也

「たかが犬だ。俺が倒せば問題ない」

メルク

「ケルベロスはただの犬じゃなくって、首が三つもあって、とっても凶暴で、とってもデカイんだ！人間が戦って勝てるレベルじゃないよ！」

蓮也

「おい、老人、それを俺にくれ」

パーン

「これは、これは、まいど！」

パーンは蓮也の胸からグナを取り出し、自身の胸に収めた。

メルク

「あ～、大変なことになった～！」

コノハ

「困りましたね・・・」

蓮也

「これは俺のことだ。お前たちには関係がない。俺は先へ行く」

コノハ

「あの～、私、アナタの守護霊なのですが・・・」

メルク

「コノハちゃんの守護対象者も大変だなあ」

ヘティス

「残りのお金は1000グナ。これが往復船賃になるのね。よーし、私も行くわ～！」

メルク

「うわ～、困ったな～。ヘティスまでイケイケだよ～」

そう言って二人はナイトマーケットを後にした。守護霊の二柱は、渋々、二人の後を追って行くこととなった。

この世には陰徳と言うものがある。その陰徳は「天に貯金する」という意味であり、あの世では通貨になる。ヘティスは、正しいことも、悪いことも、全てこの宇宙が見ているのだと思うのであった。

### 【解説】

守護霊は蓮也とヘティスのアニマ・アニムスである。そのため、蓮也の守護霊は女性像（アニマ）、ヘティスの守護霊は男性像（アニムス）とした。羊神パーンは老賢者である。

